

風の送り

(男1 女1) 一幕七場

あらすじ

停電の夜、おじいちゃんは不登校の孫・明日香に話しかける。それは人の心を読む妖怪サトリと娘の悲しい恋の話。それを聞いていた明日香は私も人の心が読めると言う。そして、おじいちゃんの心の中に住む「あすか」さんって誰？と尋ねる。それはおじいちゃん(悟)が大学時代愛した女性だった：

上演記録

平成二〇(2008)年度山梨県校演劇大会最優秀(県第一位)
平成二〇(2008)年度関東校演劇研究大会・千葉大会参加

連絡先

t040125@yahoo.co.jp

はやおとうじ(砂澤雄一)



はやおとうじ作 風の送り

登場人物

男・・・おじいちゃん、悟、サトリ
女・・・明日香、あすか、娘

1

外は暴風雨。部屋の中は薄暗い。おじいちゃんはテレビを見ている。
明日香は、宙を見つめてポーツとしている。
臨時ニュースが流れる。

声
台風情報をお伝えします。大型で並の勢力を保った台風十九号は、現在紀伊半島沖を時速八十キロで東北東に進んでいます。中心の気圧は、八七五ヘクトパスカル、中心部の最大風速は三五メートル。半径一〇〇キロ以内の風速は二五メートルを越えています。一五日の未明には東海地方に上陸する見通しで…

男、立ち上がり、部屋を出ていく。左足を引きずっている。
部屋にはテレビの灯が明滅している。外は相変わらずの暴風雨。
パチンと全てが消える。停電。

女
キャツ

男が、懐中電灯で自分の顔を不気味に照らしながら登場。

男
・・・

女
・・・

男
怖いだらう？

女
・・・

男
・・・怖くない？

女
・・・馬鹿みたい

男
馬鹿みたいか。そうだ、馬鹿みたいだらう。

女
・・・

男 いやいや、そうか、そうか。

女 ・ ・ ・ ・ ・

男 停電だ。珍しいな。最近、停電なんてめったにないからな。

明日香、こっちに来い。
停電の時は、家族がみなちやぶ台の回りに集まって、蝋燭で照らされるという
のが、正しい過ごし方だ。

女 ・ ・ ・ ・ ・

男 ほら。蝋燭。

女 ・ ・ ・ ・ ・

男 このまま、停電がずっと続くといいな。 そう思わんか。

風雨の音。

大きな物音がして、女、びくっとする。

男 びくくりしたな。明日香。こっちへおいで。

明日香行かない。

男 まあ . . . いいわ。どれ、蝋燭に火を付けてみるか。

男 蝋燭に火を付ける。

男 ・ ・ 懐かしいな、この感じ . . .

明日香、おじいちゃんが子供の頃はな、停電になるとこうして蝋燭を立てて、
家族がみんな集まったんだ。そしてな、誰もともなくみないろいろ話をする。
そうだ、わしが小さかった時に、わしのおじいちゃんがな、子供たちにこわい
話をしてくれたんだ . . . 聞きたいだろう。

女 ・ ・ ・ ・ ・

男 まあ、無理にとは言わないが、こっちへ来ないか。わしが、その頃聞いた話を
思い出しながら、明日香に聞かせてあげよう。
おお、その前に

男は懐中電灯でまた不気味に顔を照らしながらどこかへ行く。
一人になった女はおそろおそろ蝋燭の火に近づき、眺めだす。
そこへ、男、怖い顔をして

男 ばー あ

女、かなり驚く。元の場所へ。

男 どうだ、驚いただろう

女 ……馬鹿みたい。

男 そーだろう、馬鹿みたいだろう。

いやー、それでも、今日は明日香の声を二回も聞けた。いい日だ。
台風だけどいい日だな！ 台風万歳。

男は一升瓶の栓を抜いて、グラスにつきはじめる。

男 いやいや、これから話をするからな、喉が乾くだろう。

そういうながら、うまそうに一息に飲む。

女 ……

男 明日香、お前、サトリの話を知ってるか。

女 ……

男 知らんのだろう

女 ……

男 その顔は知らないな

女 ……

男 いかんな

女 知らないよ。知らないとダメなの

間髪入れずに

男 明日香、こっちへ来い。蝋燭の回りは温かいぞ。

サトリというのはな、妖怪だ。山にすんどって、旅人なんかを通り掛かると脅かすんだ。でも、そんなに悪い奴じゃない。脅かすだけだ。人が驚くのを見て喜ぶんだ。

女は動かない。

男 それでな、どうやって驚かすかというところ…
どうやると思う

女はぶいと顔をそむける。

男 サトリはな、人の心の中を読んでしまうんだ。
だからサトリ。旅人の思っていることを全部読んで、それを言うんだ。言われ

た方はびっくりするだろう。で、驚いて、ギャーッつと逃げていく。それをみてサトリは面白がっていた。だから、そんなに悪い奴じゃないんだ。おつ、そうだそうだ。

男はまた出ていく。

女は、また少し蠟燭の方へ近づく。火を見つめている。

男、鉢巻きに懐中電灯を二本さして登場。

男
がーっ

女、少しあとずさる。男、こわい声で

男
明日香ーっ、お前はコレを飲みーっ

とジュースのペットボトルを出す。

男
話すと喉が乾くんのだ。

明日香、ペットボトルとグラスを受け取る。

男
どこまで話したかな。・・・サトリの話だったな。そうそう、

ある時、サトリは恋をしてしまったのだ。恋だ。恋。ドキドキするだろう？

女
・・・

男
その相手というの、村里の庄屋の一人娘なんだ。大変な器量よしで、器量良しってわかるか。美人だったんだ。まあ、庄屋の娘なんで、綺麗な着物も着せてもらってたんだ。

サトリは何とか娘の気をひいて、付き合いたい思っていた。それで、庄屋の家まで下りて行って、娘の様子を密かに眺めていた。

その娘は数えで二十にもなるというのに、まだ嫁にもいかない。あんな器量よしがない、と村人は思っていたくらいだ。ただ変わったところがあつて、時々ぞつとするような艶かしい目で、遠くを眺めていることがあつた。

サトリはいつい、夢中になって、庭の中にまで入って、娘のことを見ようとした。そしたら！
どうなったと思う。

女も段々気になってい様子なのだが、問い掛けられてまた横を向く。

男

サトリは娘に見つかってしまったんだ。サトリはしまったと思った。すぐに追いかかると思った。ところが、娘はサトリを追い払いはしなかった。お前は何者か、と聞いたんだ。

突然、蠟燭が消える。

2

照明が変わる。

女 お前は何者か

男、身をこわばらせて答えない

女 それでも隠れているつもりなの。
わが眼(まなこ)は千里先をも見通すものを
…もう一度聞く、お前は何者か

男 …わしや、サトリじゃ

女 サトリ？

男 そうじゃ、山に住む妖怪じゃ。

女 妖怪？

女はさもおかしいというふうに笑う。

男 なにがおかしい

女 随分と弱々しい妖怪もいたもんだね

男 うるさい

女 して、その妖怪がなんの御用？

男 用？用などない

女 用もなく、わが屋敷に踏み込んだか。覚悟はできているのかい

男 ま、待ってくれ

女にやりと笑いながら

女 では、なぜ庭にいた

男 それは

サトリは赤くなって俯く。

女 ホホホホ、なにを赤くなっているの

男 ……

女 妖怪とやら、一体、どんなことができる

男 ……人の心が読める

女、少しひるんで…

女 ほう、ならば私の心を読んでみよ

男 たやすきこと

しかし、サトリには女の心が読めない。

女 ……どうした、口先だけか

男 ……違う

女 ではどうして私の心を読まぬ

男 それは…

女 つまらいね…せっかく面白いことでも起こるかと思えば、とんだ見かけ倒しだねえ。妖怪というもの怪しいもんだ。

男 うそじゃねえ。うそじゃねえんだ。

女 じゃあ、この私の心のうちを覗いてご覧よ。え、どうしたんだい。

男 サトリは惚れた女の心は読めないことになってるんだ

女一瞬、あつげにとられる。そして笑い出す。

女 ホホホホホホホ、おかしなこと。お前、私を好いているのか。

男 ……ああ

女 ホホホホホホホホ

男 笑うな

女 ……良かったじゃないか。妖怪。お前命拾いをしたんだよ。ホホホホ…。

男 命拾い

女 世の中にはね、知らない方が幸せなことがたくさんある。惚れた女の心根が身の毛もよだつおぞましいものじゃあね…。

男は様子が飲み込めないでいる。

女は落胆とも安堵ともつかない表情をしていたが、急に

女 お前、本当に私を好いているのかい。

男 ……ああ

女 本当なんだね。

男 頷く

女 では、一つお前に頼みがある。

男 頼み？

女 そうだ。明日の明け方までに私の言ったものを捕まえて、ここに持ってくるのじゃ、いいか。

男 もつてくればいいのか。もつてくれば、わしのことを好いてくれるのか。

女 そうだ。ただし、明日の明け方までにだ。できるかい。ちよつとでも遅れたら、お前はもう私を見ることもできなくなる。大丈夫かい。

男 ああ。して、何を持ってこいと

女 女郎蜘蛛を百匹。

男 女郎蜘蛛？そんなもの、百匹もどうする。

女 お前は余計なことを考えなくて良いんだよ。持ってこれるか。来れないのか。

男 ……明日の明け方までだな

ふっと灯が変わる。

3

照明が変わる。

男 それでな、サトリは次の朝までに女郎蜘蛛を百匹捕まえて、籠に入れて持って

いった。百匹もいるから争って、共食いなどしている。

それでも娘は、嬉しそうにそれをみつめて座敷の中に入ってしまった。

次の日サトリが庭へ行くと娘がこういうのだ。

「明日の朝までにママシを百匹捕まえてきておくれ」

ママシがどうしてそんなに必要なのか、サトリには分からなかったが、それを持っていけば好かれるのだと思うと、一生懸命山の中でママシを捕まえた。

そんな日々が何日も続いた。サトリは、娘に言われるがままにムカデやらナメクジやらヒルなんぞを百匹ずつ捕まえて持っていた。

女 ……

男 変な娘だろう

女 ……

男 そうでもないか？

男は、グラスの酒をゆっくりと飲み干す。

男 明日香には分かるかもしれないな、娘の気持ちが

激しい風雨の音。

男 ……学校なんざ、行きたくなければ、行かなくなっただっていい。

グラスに新たに酒をつぐ。

女 ……

男 行かなくなっただっていいさ。行きたくなるまで行かなくやいい…

女 ……おじいちゃんに何が分かるの

驚いたように女を見つめる男。しかし、ゆっくりと落ちついた声で…

男 ……分らん…。…何も分らんよ

酒を飲む。

男 お腹が痛くなるんだろう、朝になると。

女 ……

男 なら仕方がない。

女 本当？

男 だって、どうしようもないだろう

女 お腹の横が痛くなるの

男 ほう

女 やけた棒で刺されたみたいに熱くて痛い

男 焼けた棒？お母さんには言ったのかい

女 うん。でも聞いてくれなかったの

男 そうか

女 そのうち左の肩せ痛くなる

男 ……ひだりの肩！

男はあることに気がつくがそれを隠して話題を変える。

男 明日香、おじいちゃんの名前知ってるだろう

女 ……悟

男 そう、サトリと同じ悟だ。

だから、本当はみんなお見通しなんだぞ、ハハハハハハ…

女 私も人の心が読める

男 ……

女 ……

男 ……ほんとか？

女 たぶん

男 いつから

女 ずっと家にいて、人にあつたことないから分からないんだけど

おじいちゃんの心が分かる時がある

男 ……ウソ？

女 ううん、ホント

男 それは…まずいな

男は慌てて酒をあおり、足りなくて継ぎ足すがこぼしてしまう。

女 おじいちゃん、「あすか」って誰？

男 ……明日香？明日香は明日香だろ

女 違うと思う。おじいちゃんは心の中で、いつもあすかかっていう人のことを考えている。

男、汗をかきだす。頻りに手拭いを汗を拭いながら…

男 まずいな。

サトリに出会った旅人の気持ち分かるな。本当に焦るぞ、これは。

女 誰？あすかかって

間

男は諦めたように静かになる。

男 あすかは、わしが、昔、愛した女の人だ。愛するって分かるか
女 頷く。

女 どこまでも真っ白な広い場所に雪が降っている。そこにおじいちゃんにあすか
さんかいる

男、本当なんだとすっかり覚悟をきめて…

男 明日香、どうやらおまえは本当にサトリになっちまったらしいな。

女 あすかさんは、ここに置いていってって言ってる。おじいちゃんはそのこと
できないって言ってる。

男 ……

女 おじいちゃんはいつものこともそのことばかり考えて、そして胸が張り裂けそう
に悲しい気持ちになっている。

男 …… そうだ。その通りだ明日香。わたしには取り返しのつかない過去がある。
その出来事のために、人生の殆どが不幸になってしまったような気がする。
…でもな、明日香。そういうふうに見える日もあるが、そうじゃなくとても
嬉しくて楽しい日もあるんだ。例えば今日だ。今日は台風だ。そして、普段、
口を聞いてくれない明日香とこんなたくさんお喋りをしている。こういう日だ
ってある。だから……まんざらでもないってことだ。

女 ……

男、酒をつぐ。

女 おじいちゃん、飲み過ぎじゃないの

男 ああつ、そうか。ハハハハハハそうだな。今日は随分と飲んでしまった。

でも、飲むのは止めない。

男 明日香。明日香は明るくて、優しく、とってもいい子だ。おじいちゃん、そ
のことをよく知っている。

女 おじいちゃんに何が分かるの。

男 分らない。分らないが、でもわしは、明日香が大好きだ。また昔のように元
気に走り回って、笑ってほしいと何時も思っている。

女 明日香は、明るい子なんかじゃないよ。いじいじして、無口で暗い子だよ。

男
・・・

女
友達なんて一人もないし・・・

男
そんなことはない。そんなことはないんだ。明日香。人間独りぼっちで生きてるってことはない。生きてるかぎりには、誰かに支えられて生きてるんだ。だから明日香だって一人じゃない。明日香だって誰かを支えてるんだ。例えばわしじゃ。

女
おじいちゃん

男
そうだよ。わしは、明日香がいない生活なんて想像もできないぞ。わしは明日香がいるからこうして毎日生きていけるんだ。

女
うそ

男
うそじゃないさ。

女
私を励まそうと思って無理して言ってる

男
そんなことはない。そんな無理などできないんだ。明日香。おじいちゃんの心はそんな無理ができるほど健康じゃない。

女
本当

男
本当さ、明日香がこうしていてくれるからわしは生きてる。明日香がいなかったら・・・もう、とっくの昔にこの世におさらばしていたかもしれない。

女
あすかさんが死んだときに？

男
・・・そうかもな

女
あすかさんって、どんな人？

男
そうだな、明るくてハキハキした、素敵な女の子だった。

蠟燭が消える。

4

風の音。銃声が数発響く。

大けがをした男女がよろけながら歩いてくる。

男は左足を、女は右脇腹を打たれている。男は致命傷には至ってないが、女はそのままではかなり危ない。

男、女に肩を貸している。しかし、よろけて二人倒れ込む。雪の上には血痕。

女
ありがとう。悟。もういい・・・私、ここで眠るわ。

男、女を抱き抱えようとする。

女

お願い、私の話を聞いて。

私があなたに最後まで抱かれなかったのは、私が潔癖だからでも、セックスを否定しているからでもないの。

いつもあなたに抱かれることばかり考えていたわ。

主義のために女を捨てた訳でもない。

ただ、私には拭いきれない過去があるの。私はあなたに相応しい女じゃない。

男

何、馬鹿なこといつてるんだ。そんなわけないだろう。

女

いいえ、そうなのよ。私が、こんな生き方をしたのも、みんな私が生まれた島のせいなの。貧しいってことは、本当に悲劇だわ。貧しさが全てのものを貧しくしてしまうの。

だから、私の生き方は当然だと思う。生きることが楽しいと思っただけは今までなかった。

でもね、悟。あなたに会えて、私、変わったと思う。生きるとはこんなにも楽しい、切ない・・そう思うようになった。

男

ずっと一緒にいよう。だから、もう話すのは止めてくれ。山を下りるんだ。

再び銃声。あすかの右肩に弾丸。女、激しくのけぞり、その後静かに前のめりに倒れる。男が支える。あすかは瀕死。しかし、話し続ける。

女

まだ、話は終わっていないわ。(はげしくせき込む)

幸せを知ったら、私、信念にも愛にも生きられないってことに気づいたの。

男

・
・
・
・

私、もうこれ以上、分裂して生きることができない。あなたが好きよ。悟。でも私は、やっぱり自分の信念に殉じたい。

男

なぜだ！ なぜいつもそうなんだ

女

・
・
・
・
サトリは娘に惚れていた。だから、娘の心を読むことができなかった。でも、いつかサトリの恋が終わってしまったら。娘は自分の心が全てサトリに読まれてしまうことを恐れたと思うの。・
・
・
でもね、悟。私、今気づいたのよ。娘は、ずっとサトリに自分の心分かかって欲しかったんだって。(せき込む) 愛されながら心も読んでほしかったんだわ。(静かに泣き始める) でもそれが出来ないから、醜いものばかり何度も持って来させて、サトリの恋心を冷まそうとしたんだと思う。

男

・
・
・
・

男も泣いている。涙でお互いの顔が霞んで見えるほどに。

女

悟。ありがとう。私あなたに会えたことに感謝するわ。(せき込む)

もし私を愛してくれるなら、私をここに置いていって。この真っ白い雪の中に私を置いていって。

男 ・・・そんなこと・・・出来るわけ・・・

女 サトリに心を読まれてしまったとき、娘がどんなことを思ったか、今の私には分かる。(軽くせき込む)。分かるのよ、悟。分かったの。今・・・

間

・・・お願い、私をこのままここに置いていつて

男 どうして君はそうなんだ。一体、何にこだわって、そんなふうになってしまったんだ

女、微かに微笑みながら

女 ・・・悟。貧しいということは、本当に不幸なことなのよ。

風の音。

5

照明が変わる。

女 おじいちゃんそれからどうしたの？

男 それからか・・・それから、わしは山を降り、五年後におばあちゃんと結婚した。そして明日香のお父さんが生まれたんだ。

女 おばあちゃん？

男 明日香が生まれる前に病気で死んでしまった。

女 どんな人だったの？

男 そうだな、優しく、余計なことは何も聞かない女だった。たった十五年しか一緒に暮らさなかったがね・・・あいつは幸せだったんだろうか。

女 お父さんは

男 ・・・なにも覚えていないのかい

女 うん・・・少しだけ抱っこしてくれた時、日向で、川が光ってた

男 ・・・

女 お父さん、どんな人だった

男 ・・・どんな人だったんだろうな。今度お母さんに聞いてみたらどうだ。

女 ・・・お母さん、嫌い。

男 そんなこと言っているのかな。

女 だって・・・

男 明日香はお母さんが大好きだ。だから、そんなことを言ってるんだよ。

女 違う！

男 ・・・・違わないさ

今は今日子が病気だから、お母さんはずっと今日子の側にいなきゃならない。でも今日子が治ったら、また昔みたいに親子三人で暮らせるさ。

女 今日子は治るの？

男 ・・・・治るとも。明日香だって妹がいなくなったら悲しいだろう？

女 うん

男 明日香は今日子のことをうらやましいと思ってるのか

女 ・・・・少し

男 お母さんを独り占めしてると思ってるのか

女 ・・・・

男 今日子は今、一生懸命病気と戦っている。応援してあげるんだ。

女 ・・・・

その立場になってみないと分からないことは沢山ある。人間は人の心を知ることとはできないからな。

女 ・・・・

明日香が、今日子だったらうれしいかい。毎日お母さんが側にいてくれて。だけど、一日中ベッドで、点滴をして、飲むと頭の痛くなる薬を飲まなきゃいけないんだ。学校にもいけない。友達と元気に遊ぶこともできない。そうやって一人で病気と戦っているんだ。

女 ・・・・

男 お母さんがついてあげてなきや、今日子は本当に独りぼっちなんだよ。

女 ・・・・明日香、我慢する

男 ・・・・いい子だな。さすがはわしの孫じゃ。

女 ……

男 いいかい、明日香。一番甘えたい盛りにお母さんに会えて、明日香もかわいそうだと思う。でもな、今一番辛いのは誰だと思う。

女 ……

男 お母さんだろう。勤めから直ぐ病院へ行って、家には寝に帰るだけだ。お父さんもいなくて、一人ぼっちで頑張ってる。だから、明日香も今日子だけじゃなく、お母さんも応援してやってくれ。

女 どうすればいいの

男 ……さあ、それは、明日香が考えてごらん

女 おじいちゃん

男 ？

女 庄屋の娘はどうして蜘蛛や蛇なんてサトリに持って来させたんだろう

男 どうしてかな

女 あすかさんは、分かる気がするって言ったんでしよう。

男 ……そう言った

女 ……娘はその後どうなったの？

男 知りたいか

女 ……悲しい話なら聞きたくない

男 悲しいかどうかは、明日香が決めればいい

風が激しく吹き荒れる音。

6

照明が変わる。

男 サトリは娘への気持ちが少しずつ冷めていくのを感じていた。

女 サトリ。いるんでしょう。

男 ここにいる。

女 サトリ、お前まだ私のことを好いてるかい

男 ……

女 ほほほほ、もう冷めてしまったのかい、案外いい加減なんだね

男 そんなことはない

女 そうかい、それじゃ、まだ私の頼みを聞いてくれるかしら

男 頼みとはなんじゃ

女 今度は人間の生首を百本あげてきておくれよ。それもみんな女のをね。なるべく若い方がいい。

男 首だと

女 なんだい。その怖い顔は。それとも怖じ気づいたのかい

男 そんなに沢山の女の首をどうするつもりだ

女 どうしようと私の勝手さ。お前はそれを取って来てくれるのか、それとも来ないのか

男 断る

女 ホホホホホ、やっぱりただの腰抜けだったんだね

男 なんとでも言え、しかし、もうお前の言うことは聞かぬ

女 私に惚れてたんじやないのかい

男 惚れていた。お前の美しさに。

女 お前は美しい。しかし、お前の心は醜い。

女 心も読めない癖にどうして私の心が醜いと言い切れるのさ。

男 心は読めない。しかし…

女 ……

男 心は…

女 ホホホホホホ、どうしたい、妖怪

男 これは

女 愛想が尽きたら、私の心が読めたのかい

サトリは頭を抱えて苦しがる

女 サトリ、お前も一端の妖怪なら、取り乱すんじゃない
今まで何百人の心を覗いてきたんだろ

サトリが苦しむ。女、サトリに近づき、その頭を抱える

女 妖怪、人の心なんぞ覗いてなにかいいことがあったのかい。

男 ウウウウウウ・・

女 サトリ、お前、私をほんの束の間でも好いていたのなら私の最後の望みをか
えておくれ

男 最後の望みとは

女 殺しておくれ

男 殺す？

女 そうだ、殺しておくれ。お前も妖怪。女一人ぐらい殺すは訳ないだろう

男 お前を殺す

女 ・・・私をこの地獄から救っておくれ

男 この俺がお前を殺す

女 私のことを少しでも好いてくれたのなら、後生だから殺しておくれ

男 ウワーーーーーッ

弾けるように女から離れる

女 サトリ。お願いだよ。私の心を読んだなら、どうか慈悲と違って手にかけてお
くれ。訳あって自分で縊れて死ぬることのできない身。ならば、惚れたお前の
手にかかり、地獄とやらに落としておくれ。

サトリ！

・
・
・

女 悟・・・きつとあなたは酔えない人なのよ・・・ままごと遊びでね。泥でつ
くったご飯とか、食べられないでしょ。だつてこれドロだろつて。(軽くせき込
む)。私の生きてる世界は、きつととても変わったルールで行われている変わつ
たゲームなんだわ。私は、泥で作ったお団子でも、おしいって真面目に真剣に
食べられる。でも、あなたは、それがままごとだつて分かっていても食べられ
ない人なのよ。

男 あすか

女 雪国に生まれたかったな。そうすれば、小さいときからこんな清純な世界をみ

男、心の中を覗かれてもしたようにしばし止まる。しかし、次の瞬間、笑顔にな
ってまた話し始める。

男 もちろんだ。おじいちゃんも今日子が帰ってきて、みんなで楽しく暮らすのを
楽しみにしてる。

女 おじいちゃん、長生きしてね。

男 ハハハハハハ、そうだな

女 おじいちゃん

男 どうした

女 おじいちゃんは寂しいの

男 寂しいことなんかあるか。こうして可愛い孫と一緒にいられるんだから。

女 かなしいことが沢山あったね。

男 ・・・・

女 おじいちゃんの心の中、悲しみで一杯だよ

男 明日香……

女 悲しい心の人が沢山いるよね。

間

男、涙を一粒落とす。

男 ・・・・明日香

わしは悲しくも寂しくもない。大丈夫だ。だから明日香も元気を出せ。

女 ・・・・うん。

男 わしは明日香のことが大好きなんじゃ。明日香に支えられてこうして生きてい
る。明日香がわしに元気をくれて、わしが明日香に元気をあげるんだ。

女 うん ・・・・おじいちゃん

男 ん？

女 あすかさんって・

停電が終わる

男 おっ

